

ムシが生息している。フトゲツツガムシは県北部の玄界灘に面した海岸地帯、および遠賀川河川敷に生息地が多いが、他地域の人家に近い里山や、深い山地にも散発的に生息している。一方、タテツツガムシの生息地は、太宰府市近辺の平地や山林と、県東部の周防灘に近い平野部に限られている。

植生に着目して両種の生息環境を検討した結果、両種とも、植物群落の遷移段階の初期から中期に相当するような、気象的にきびしい環境に適応的であり、タテツツガムシはその傾向が一層強いと推測した。また、タテツツガムシがオギ群落にも生息することから、この種が乾燥地を好むという従来の常識は正しくないことがわかった。

鹿児島県大隅で採集された *Doloiisia* sp. について 鈴木 博 (長崎大・熱研)・内川公人 (信州大・医)・野田伸一・山本 進 (鹿大・医) — 鹿児島県大隅地方で土壌採集法により恙虫の媒介種を調査中である。これまでに採集された恙虫は5属9種である。この中、*Doloiisia* 属に含まれる一種はこれまでに報告されていない種とみなされた。

その特徴は、既知種 *D. minamii* に似るが、第I脚の基節毛が3本、第III脚の基節毛が15本と多く、第II脚の腿節に長い単条毛を備えている。また、感覚器は球状で *D. minamii* のバット状とは明らかに区別される。ほかの既知種とも種々の点で相違が見られ、新種の可能性が高い。

しかし、採集された個体が1頭のため、更に採集数を増やして結論を得たい。

ミカンハダニ・モクセイ系統のアルビノ型と正常型との交配における胚致死性 北嶋康樹・後藤哲雄 (茨城大・農・応動昆) — 筆者らは、ミカンハダニ・モクセイ系統のアルビノ個体の遺伝的メカニズムを明らかにする段階で、ふ化率の低下あるいは雌率の増加を伴う組み合わせのあることを観察したので、その原因を解析した。正常型同士およびアルビノ型同士の交配では、ふ化率が96%以上で雌雄比が2:1であった。型間の正逆交配で得られたF₁雌にアルビノ型の雄を交配するとふ化率は約50%に低下し、雌雄比は2:1であった。これに対し、F₁雌と正常型の雄との交配では、ふ化率が70~80%、雌雄比が4:1になった。未交尾のF₁雌が産下した卵のふ化率は約50%であった。これらの結果から、正常とアルビノ個体の交配では、F₂世代に現れる胚致死性が交配の方向で異なり、F₁雌と正常雄との交配では雄卵のみが50%死亡するのに対し、F₁雌とアルビノ雄との交配では雌雄ともに50%死亡するために、ふ化率や性比が同型内交配の値からずれるものと考えられた。

カンザワハダニのクズ系統とチャ系統間の交配 五味 康・後藤哲雄 (茨城大・農・応動昆) — カンザワハダニは広食性の種であるが、その情報はチャに寄生する個体群に偏っている。そこで筆者らは本種の寄主範囲に注目し、科の異なる4種の植物から採集した個体群を用いて本種の全体像を解明する作業を行っている。今回は、各個体群の生殖和合性について報告する。(1)チャ、アジサイ、ナシの3個体群間には生殖隔離がなかったため、これらをチャ系統と総称した。しかし、(2)クズ個体群の雌はこれら3個体群の雄と交尾しても雌を産出しない一方向不和合性を示したので、クズ系統と称した。(3)チャ系統とクズ系統の